

文献紹介

大阪大学総合学術博物館・大阪歴史博物館監修
『城下町大坂—絵図・地図からみた武士の姿—
(大阪大学総合学術博物館叢書3)』

大阪大学出版会 2008年2月刊

A4判 100頁 2,100円

本書は、平成20年2月20日から3月31日まで、大阪歴史博物館で開催された特集展示「城下町大坂」に際して、編まれた図録である。同展覧会は、大阪大学総合学術博物館と大阪歴史博物館の官学連携企画であり、これからの博物館運営における在り方の一つとも目される。

さて、同書が意図するところは、そのはしがきに「大坂城は西日本最大の幕府の軍事的拠点として位置づけられていました。城であるからには武士がおり、城下町であるからには武士の存在がその中心であったといえます。しかし、江戸時代の大坂では、あまりにも武士が存在していたという印象に乏しい感があります。大坂といえば、「天下の台所」であり、商人の町と誰もが考えるためです。この250年以上もの間、大坂城はどのような存在意義をもち、そこと大坂の町を舞台に武士達がどのような活動をしていたのか、また、大坂城がどのように管理されていたのか、という問いが本書のテーマとなっています」と記載されているところからも明らかであろう¹⁾。町人(商人)の町大坂という、従来ステレオタイプ化されてきたイメージからの脱却を図ることで、近世の大坂を見つめ直す一つの機会を与えてくれているのである。大坂を武士の町と位置づけようとする試みとしては、藪田貫氏の研究成果²⁾があるが、この展示および図録では、それを十分補強する内容となっていることがうかがえた。

同書の構成は、図版編と解説編からなっている。図版編には、63件の各種史資料が掲げられ、解説編では「Ⅰ 城下町大坂—絵図・地図からみた大坂の武士の活動—」「Ⅱ 武士の情報と生活—武士と町人の接点—」の2項目を設け、図版編に掲載する史資料や参考図版を用いながら、全体像を論じている。

解説編の内訳と執筆者は、以下の通り。

Iは、(1)大坂の武士と絵図・地図[鳴海邦匡]

(2)大坂城入城[鳴海邦匡](3)大坂の武家屋敷[渡辺理絵・鳴海邦匡](4)大坂湾警備の展開[松尾晋一]また「発掘された城代家臣屋敷」のコラム[大澤研一]で構成される。IIは、(1)武士の情報の出版[相蘇一弘](2)町人による情報の収集[大澤研一](3)武士と出会う場所[大澤研一]である。

まず、全体的な感想から。「です」「ます」調を用い、かつ平易な文章で書かれているために分かりやすい。専門家のみならず、展覧会の観覧者にも広く読んでもらうことを意図したためだと推測される。これが的を射ていれば、文章中の語句にもう少しルビを付しても良かったであろう。意外と固有名詞や歴史用語には読みづらいものがあるからである。

以下、各氏の執筆を読んで、気になった点などを記しておこう。

まずIでは、「大阪湾」と「大坂湾」の二例の語句が用いられているのが気になった。当時の語句からすれば「摂海」だと思うが、厳密な使い分けはなされていないように見える。統一を図っておく必要があったであろう。

同じく、Iの(4)では、プチャーチンの大坂湾(天保山沖)への停泊を1854(安政元)年9月18日とするが(79頁)、正しくは1854(嘉永7)年であろう。また、図53「大坂御固新図」を引きながら、「天保山を中心に西は兵庫、南は堺、北は京都という広範囲を描く」(同頁)とするが、図版を見た限りでは、大坂城の東北部に位置した「片町」や「鳴野口」が確認できるが、京都を見出すことができなかった。

次に、IIの(3)では、『浪花百景』から武士が登場する場面をもとに解説を行っており、絵師の空間認識という点でも興味深い。大澤によれば、それを5場面とする(91頁)が、『浪花百景』をみたところ、それ以上に武士の姿を見出すことができる。「川口雑喉場つきじ」では、船手奉行の建物と着座する武士が描かれているのはじめ、「北之太融寺」「八軒屋夕景」「森の宮蓮如松」「両本願寺」「四ツ橋」「永代浜」「あみだ池」「梅やしき」「生玉絵馬堂」「真言坂」の11景、大坂市なか

ら離れるが、「うらえ杜若」「炭住吉」「天保山」「宗禅寺馬場」「三島江」の5景にもその姿を確認できる。遠景で描かれている図には、人物表現が小さく、武士と判じがたいものもあるので、さらにその数は増すと思われる。

これら描かれた武士は、大澤も指摘するように、絵師さらには大坂の住民たちにとってしかるべき空間に位置づけられていたのであろう。この視点から『摂津名所図会』などを紐解けばどうなるのか、余暇時間に出向いていた場、武士の行動空間を探るのも興味深いと考えられる³⁾。

本書の狙いは、絵図・地図から大坂城に勤める武士の姿をもとに、大坂の町を見直すという試みである。「大坂城」が鍵であるが、大澤も若干ふられているように、武士の姿といわれて想起されるのは、中之島・堂島地域を中心に設けられた諸藩の蔵屋敷である。当然のことながら、ここにも諸国から自藩の蔵屋敷に勤める武士の姿があった。これらの武士の姿を併せると、城下町そして商業機能の中心地であった大坂の様相がより具体的に浮かび上がってくると思う。今後、更なる史資料が見出されることで、多様な城下町大坂の世界が描かれることを楽しみにしたい。

(小野田一幸)

〔注〕

- 1) 展覧会の紹介リーフレットでも「殿様のいない大坂城では、将軍に代わって譜代大名や旗本らが交代で勤務し、大坂城の警備やその他の政務に当たりました。その筆頭が大坂城代であり、以下、定番、大番、加番などが任を勤めていました。本展示は、絵図・地図によってかれらの活動の一端を見ていこうというものです」と謳われている。
- 2) 藪田 貫「武士の町」大坂, 関西大学文学論集48-2, 1998, 1~27頁, のち同『近世大坂地域の史的的研究』, 清文堂出版, 2005, に収録。同「武士の町」大坂という問い, 歴史評論676, 2006, 41~52頁。また, もう一つの近世大坂のイメージである「天下の台所」については, 野高宏之が, 同「天下の台所」と「大大阪」, 大阪の歴史70, 2007, 63~98頁, で見直しを迫っている。
- 3) この点に関わる試みとして, 大坂城代を勤めた関宿藩主久世広明に従い赴任した池田正樹の記録『難波嘶』(森銑三他編『随筆百花苑』第14巻, 中央公論社, 1981)をもとに大坂の世相を記した, 渡邊忠司『大坂見聞録 関宿藩士池田正樹の難波探訪』, 東方出版, 2001, がある。